

## MRA発足五十周年記念号

### 第四十二回MRAコー世界大会開催 テーマ「今こそ道義と精神の改革を」

一九三八年にMRAが発足して以来、五十周年に当たる今年には、インド、日本、フランス、韓国、そしてイギリス等で様々な記念行事が開催されてきているが、去る七月八日から八月二十八日にかけて「今こそ道義と精神の改革を」のテーマの下に開催された、コーの世界大会もその一翼を担うものであった。

戦火の続くレバノンからの代表を初めとする地中海沿岸諸国の代表が集まった「地中海会議」を皮切りに、「医療関係者会議」、「青少年会議」と続いた。更に八月には、各国の民族衣装が一段と華やかさを増す「アジア・アフリカ・太平洋会議」が開かれ、フィリピンのマングラプス外相夫人や各国大使をも含め多彩な参加者による、心を開いた交流がなされた。更には、体験の交換を通して地域問題の解決の鍵を探った「都市問題会議」、そして貿易摩擦解消を目指した、日米欧財界人代表による「第三回コー円卓会議」、そしてMRAの考え方である「何が正しいか」で物事を決めるのが労使話し合いの基本姿勢になっていると語った、第十二

回東芝労使代表団の参加した「産業人会議」でその幕を閉じた。  
自国の変革を目指している、社会主義国からの参加者が目立ったのも今年のコー会議の特徴であった。日本からは、他にも関西日本スイス協会派遣の中学生六名、東芝清水副社長、キヤノン賀来社長他産業人、ベルン駐在松原大使を初め七十余名が参加した。  
以下、会議の様子を参加者より報告して頂いた。

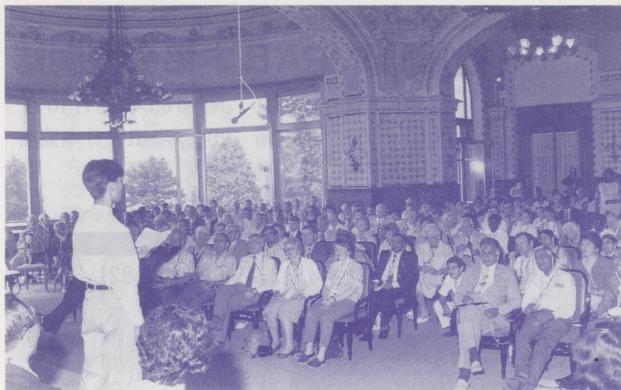
第42回コー世界大会レポート	1 P
第3回コー円卓会議レポート	7 P
日米欧財界人円卓会議に参加して 清水 榮	9 P
第3回韓国MRA世界大会レポート	11 P
第11回関西秋季大会レポート	17 P
極東ペレストロイカ事情／藤田幸久 ——ウラジオストックを訪れて——	18 P

# 青少年会議 参加レポート

テーマ：「新しい潮流の創造」

期間：7月20日～30日

未来を担う世界の若者達の交流の場として毎年開催されているこの会議では、セミナー、グループディスカッション、スポーツ、音楽や寸劇の発表、料理、給仕など多彩なプログラムが組まれている。今年は大阪から6名の中学生が参加した。



## 国境のない世界で



佐藤由香  
(花乃井中学校)

コーでのMRA青少年国際会議はたった三日間の短い間でしたが、私にとって、人と人との触れ合いができた良き思い出となりました。

初めMRAに参加する前は、「見知らぬ言葉が違う人達と本当に仲良くできるかな？」と心配していましたが、実際に交流していくうちにそんな不安は吹き飛んでしまいました。

食事、バレーボール、ティータイム、発表会などあらゆる場で沢山の世界の人達と接し、話すことができました。お互いの国のこと、自分自身のことなどを話していると、相手の国の状況や日本との関係なども分かります。世界が一気に身近なものに感じられました。又、通りすがりの見知らぬ人同士が気軽に「ハロー」と声をかけあっていました。マウンテンハウスは国境のない一つの世界であり、一つの家族でもあるのです。

ここで学んだことや意見を発表するプレゼンテーションに私たちも参加し、スピーチや日本の歌を歌いました。この表が終わってからも、

皆さんが「良かったよ」と声をかけて下さりとても嬉しかったです。他の皆さんも、ここで学んだことを伝えようと一生懸命頑張っているのを見て、「見知らぬ人同士でもあれだけ力を合せることができるんだな」と感動しました。

この共通語は英語です。私は英語が上手ではないのですが、相手の方も私が理解できるようにゆっくり話して下さったし、私もできるだけ気持ちや伝えようとジェスチャーなども交えて頑張ったので、言いたいことが通じたときはとても嬉しかったです。

このマウンテンハウスでは、様々な人々を通じ世界を見たり、知らなかったことを知ることができました。この会議には、是非もう一度参加してもっと視野を広めたいと思います。

## 平和の大切さを知る



深谷恭子  
(本庄中学校)

MRAという名前を口にする度に私の頭の中を、沢山の思い出と多くの人々の顔が、次から次へと駆け巡ります。MRAで過ごし、

私にとっても大きな影響を与えてくれました。

人々が互いに理解し、協力し、助け合いながら生活しているマウンテンハウスはとても学ぶことの多い場所でした。その中でも特に印象に残っているのは、プレゼンテーションという意見発表の体験です。いろいろな人の意見を理解し、そして許すということの大切さを身をもって体験することができました。

今まであまり知らなかった国のことも、その国の人から直接聞くことができました。また、戦争に苦しむアジアの人々の話を聞いて、その平和を求める心は、平和に暮らしている私たちが頭に描いていた以上に強いことを知り、平和の大切さを改めて実感しました。国と国の戦争や対立もその原因の根本は、私達一人一人の心の中にあるのではないかと思いました。

言葉が通じない時には、身振り手振りや、意志を伝えようと頑張りました。そして国籍や言葉が違っても、お互いに理解し合おうという気持ちがあれば、わかり合え、言葉はその手段にすぎないことを実感しました。コー世界大会に参加した人々は、その感謝の気持ちを勤労奉仕で表すということなので、私はクッキング

・チームに参加しました。沢山の人の食事をつくるのですから、全員で協力しあいながらの楽しい作業でした。しかし、数多くの素晴らしい経験をさせていただいたのに、これだけの奉仕では他の人々に対して申し訳ないような気がしました。

MRAに参加できたことは、とても貴重な体験でした。一人一人が何らかの形で協力し、尊重しあい、理解しあうことにより、よりよい世界がつくれるのではないかと、世界中の人々に平和が訪れるのではないかと、MRAの存在を考える度には、頭の中には大きな希望が生まれてきます。

## 三百人分のハンバーグ



田中敬章  
(喜連中学校)

コーのMRA国際青少年国際会議に三日間参加し、多くの外国の人たちと出会った。大ホールでは毎日会議が開かれていて、いろいろな人が演説をしたり、勉強したことを発表していた。また、演劇をしていたグループもあった。僕も、外国の人たちの前で英語でスピーチをした。スピーチをする前はかなり緊張したが、

いったん話始めると思っていたより落ち着いて、ゆっくりと大きな声で話すことができた。僕は「努力」という言葉が好きなので、それについて話したが、聞いている人たちは理解してくれるだろうかと不安だったが、スピーチ終了後、聞いていた

人達が誉めてくれたのでホッとした。これからも人の前で話さなければいけないことがあると思うが、その時はマウンテンハウスでの経験を活かして、堂々と話せるようにしたい。会議の休憩中や食事の席でも多くの人と話す機会があったが、僕の英語力が弱いため十分に話せなかったので残念だった。

二日目の夕方に僕はクッキング・チームに加わって、ハンバーグを作った。三百人分を作るので材料が多く、三人で肉を混ぜても時間がかかり、かなり疲れた。しかし、自分たちで作ったハンバーグはとてもおいしかった。

会議や食事中の話などで、「他人を変えようとするならば、まず自分自身が変わらなければならぬ」と教えられた。他にも沢山のことを教えられたが、この言葉が一番印象深く残っている。

今回は三日間だけの滞在だったが、この次は三週間ぐらい勉強するつもりで

りてMRA会議に参加し、と思う。その時に外国人の人たちと理解を深めるためにも、英語などをしっかりと勉強しておきたい。

## 世界家族の一員に



竹本典樹  
(高津中学校)

二十二日間のスイス旅行の中で、MRA国際青少年会議に参加したこと

がとても印象に残っています。会議が開かれていたマウンテンハウスは、昔の宮殿を思わせる素晴らしい建物でした。そこでは各国の若い人たちが、自分の国について、スピーチや演劇等で紹介していました。また、MRAを通しての自分の成長の話をしている人たちを見てると尊敬させられ、僕自身の将来についても考えさせられました。僕もスピーチや歌を披露しましたが、皆さんは真剣に聞いてくれました。

また、アジアの人たちの話を聞いてみると、今でも多くの国が、戦争で困っていることがわかり、そんな問題について、真剣に考えている人たちの姿を見て、とても感動しました。

マウンテンハウスは世界の国々が

一つになれる可能性を持った数少ない場で、MRAのスローガンである絶対正直、絶対無私、絶対純潔、絶対愛の四つの標準を皆が守り、一つの大きな屋根の下で、お互い助け合いながら生活していました。三百人分のハンバーグを作っていた時、僕もMRA世界家族の一員になれた気がしました。

三日間という短い期間でしたが、とても楽しく、又多くのことを学びました。そんなMRA会議に数年後心身ともに成長した時に再び、参加したいと思います。

## 世界の若者との交流



柿本理恵子  
(井高野中学校)

日本を出発する前から、「世界の人々と会い、友達をたくさんつくろう」と、胸を弾ませていました。

私の宿泊したマウンテンハウスは、まるでお城のようで、私達の部屋は、一番高い八階にあり窓から見る山や湖などの風景は、文句のつけようのない素晴らしい景色でした。レマン湖の美しさにも感激しました。

「一番緊張したのは、「スイスで何を学びたいか」という内容のスピーチをした時です。スイスが永世中立国であることに以前から興味を持っていたので、そのことについて話しました。百人以上の人々の前でスピーチをしたり、歌を歌ったりするのは初めてだったので、どきどきしていたのですが、本番ではジェスチャーを交えながら落ち着いて話すことができましたように思います。

ミーティングでは、他の参加者たちがMRAで学んだことを劇にしたり、スピーチをしているのを見ていて、とても勉強になりました。

アジアの人たちが集まったのミーティングでは、二人ずつのペアになって、相手と話し、相手の方の紹介を順番にしていきました。私の英語はまだまだ未熟なので、十分に相手の方の紹介ができるかどうか心配だったのですが、私のパートナーだったオーストラリアの女の方が、親切に紙に書いて下さったので、何とかうまく伝えることができました。どんな時でも大きな拍手で応じる人々の姿に、とても感動し人々の心の温かさを感じました。

又、戦争という緊張状態の中で生活しているレバノンや、豊かな生活を求めている発展途上国の状況を、

聞くことができしました。日本とそれらの国々の状況が同じではないことを実感しました。十分に理解するには難しい内容でしたが、これから本や新聞で勉強し、文通をして世界に目を向けていきたいと思えます。

今年の秋に、韓国のソウルでオリンピックが開かれましたが、政治、人種、国境を越えて世界中の人が参加した姿に感動しました。近い将来スポーツだけでなく、他の面でももっと交流が深まることを祈ります。

MRAは二十一世紀をになう若者が国際交流を行ない理解を深め、地球上の人類が皆兄弟になっていくための大切な役割を果たす機関だと思えました。

私は、今回出会った友人達と手紙を通して交流を深め友情を育てていきたいと思っています。

## スピーチに挑戦する



松尾比呂子  
(野田中学校)

世界中から沢山の人が集まって、お互いの国を理解し合う素晴らしいMRA会議に参加できて、とても良かったと思います。言葉が完全

に通じなくても多くの友達ができました。

私の部屋は最上階にあったので、荷物を運ぶのにひと苦労しましたが、窓からの眺めの素晴らしさに感動しました。美しいレマン湖のほとりのシオン城が小さく見えて可愛らしく思いました。壁には花の絵がプリントされており、机の上には花が飾られてありました。もし、これが自分の本当の部屋であつたらどんなにいいかと思われました。

イベントも盛り沢山で、バレエボール、お茶会、映画上映などがありました。一番印象に残っていることは、演劇です。会議の参加者がグループごとにオリジナルの劇を作っていました。感情表現のうまさに驚きました。

私はスピーチに挑戦しましたが、私の語学力の乏しさにもかかわらず、皆さんが熱心に聞いてくれたので良い思い出となりました。

悩みを抱えた人たちが沢山来てました。南アフリカ共和国のアパルトヘイトのあまりの酷さにびっくりしました。

沢山の経験を与えてくれたMRAに感謝しています。又、何年かたった時にまたコーを訪れたいと思います。



## 「MRAの歴史」のビデオ<sup>(ベータ)</sup>(VHS)

ができました。

ダビングを2,000円(送料込)で承ります。

詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

TEL(03)821-3737



## アジア・アフリカ・太平洋会議

期間：8月3日～10日

この会議ではアジア・アフリカ・太平洋地域から集った参加者が、各地域の抱える諸問題の共通項を探り、解決の糸口を共に考えた。

## 都市問題会議

テーマ：「都市における変革」

期 間：8月12日～18日

私にとって今回は昨年に引き続き二度目のコー世界大会参加でした。出発の一カ月前までは、まさか今年もスイスに行けるとは考えてもいませんでした。昨年の四十日間の長期滞在では、言葉の壁に苦しみ、また「ここでは何か深い意味のあることを話さなくてはならないのでは？」と自分で勝手に考えてしまい、精神的なプレッシャーに悩まされました。しかし、あのスイスの美しい景色が忘れられず、今年も私にとって試練の場でもあるコーのマウンテンハウスに行くことを決心しました。



## 他人のために祈ることの大切さを知る

ヘルガ・ミュラー

去年の話になりますが、会議に参加し他人の話をただ聞いているだけなのに、あたかも自分が世界情勢について論じ合っているような錯覚に捉われることもありました。でもたとえそれが錯覚だったとしても、それまでその存在すら知らなかった国



## 何より大切な正直な心

永峰明美

私は今回初めてコーの世界大会に参加しました。MRAのこともよく知らず、外国の人たちと接するのも初めてだったので、戸惑いと緊張を覚えました。しかし、コーで出会った人たちは皆さんとても親切で、言葉は通じなくても、何か心が伝わってきました。

部の仕事の世界大会に参加している人たちの手で行われていることです。私も一回だけ、食器洗いの手伝いをしましたが、あれだけ多くの、それも国籍の違う人たちが一つにまとまって働いていることに驚かされました。言葉は通じなくとも一緒に汗を流すことによってお互いが理解できたような気がしてとても不思議でした。

日本に帰ったら改めて語学の勉強をしようと思ったのは勿論ですが、これまで、私には関係ないからと知らずとさえしなかったことの中には、本当は知らなければならぬことが数多くあるということが分かり、自分の視野を広げる必要性を痛感しました。そして、何よりも自分の意見をしっかりと持ち、自分の心に正直であることが大切だということが分かりました。

大学生(写真左端)

に目を向けるようになったのも、その国から来た人とコーで知り合えたからだと思うのです。

今年のコーでは自分自身を静かに見つめる機会がありました。朝霧の中、バルコニーで椅子に腰をおろし静かな時間を持つと、自分のいたるなさを他人に押し付けている私が見えてきたのです。家庭でうまくいかないのを母のせいにし、学校では友人を批判し、まわりが変わることを期待していたのです。しかし、やはり自分が変わらなければならぬことに気が付きました。そうすることによって物の見方が変わり、周囲が明るく見えてくると思ったのです。

昨年は色々な国の若者達とスポーツや劇を通して話し合える機会がありました。短期滞在であった今年は行動を共にした日本人の優しさに触れることができました。私は関西MRAツアーに参加させて頂いたのですが、そのメンバーの一人が私に、「自分をダイヤモンドだと思いなさい。磨かれながら傷つき痛みを感じ、そして美しく輝くのです」とおっしゃいました。つらい時はこの言葉を思いだし耐えていこうと思えます。

マウンテンハウスでは毎晩、同室の日本人の方と一緒に祈りました。クリスマスチャンである私は心の平安というものを初めて体験しました。私のために一生懸命祈って下さったその方に大変感謝しています。私もまた他人のために祈ることを決心しました。他人の幸せは自分の幸せにもつながると思うのです。自分だけが幸せになれば良いという考えでは本当の幸せはやって来ないと思うのです。

何も知らない平凡な女の子がMRAに巡り合えたのも神の力だと思えます。MRA精神をこれからも大事にして私の生活に活かしていきたいと思えます。

啓明学園高校二年生



## 29年振りに コーを訪れて

沖田幸治

「コーのマウンテンハウスが突然消滅する訳でもないし、そのうち訪ねたいと思っているよ。」

これが、ここ数年の私のセリフだったが、家内が、「是非今年のツアーに参加したい」と強く希望し、結局ギリギリの滑り込みでツアー参加を受け付けていただいた。家内にとっては初めての海外旅行ということもあり、体調の変化を大変心配していたのだが、マウンテンハウスではさながら水を得た魚のごとく、元気で積極的に行動し、家内を大いに直し尊敬を新たにした。

「二十九年前コーで静かな時間を持ち、いかに私が傲慢で支配的な夫であったかということを書いて手紙を書いた。家内は今でもその手紙を大切に保存している。私は三十九年間、造船所の設計エンジニアとして一生懸命に船を造り、輸出し外貨を稼い

で戦後の荒廃した日本の復興に努力してきた。そしてそれは成功したと自負しているが、貿易不均衡など海外の皆さんに大変迷惑をかけていることも教えられた。自分のこと、日本のことだけを考えた他の国々への配慮が欠けていたことを反省している。今回の滞在で再びチェンジする決心をした。まず、もっと広い豊かな心を持ち、物質的ではなく深い部分で人生をエンジョイすること。それからこの素晴らしいMRAのアイデアと共に世界中の人々が平和で、幸せに暮らし、そして繁栄をエンジョイできる新しい世界を作るために一緒に働きたい」という決意をマウンテンハウスの壇上で述べ、次いで家内も、「主人を通してMRAを知りました。実践するのはなかなか難しいと思いましたが、まず自分の身の回りですることから始めることによつて、世の中に対して自分にもできることがある、との自信を得ました。これから小さなことから一つずつ取り組んでゆきたいと思っています」という決意を述べた。

十二年前に私はブラジルの造船所で技術協力をするため、若い設計者達二十名とリオデジャネイロの近くで一年五ヵ月滞在した。その際、お世話になったブラジルMRAの責任者

であるフォーゲル夫妻やヴァリグ・ブラジル航空の電子エンジニアのブイグ夫妻と今回、思いがけず再会した。当時を振り返ると、リオのタクシードライバー達とMRA集會に参加したり、港湾労働者のアパートの集會所で、学校の先生や実業家を交えて劇の打ち合せなどした大変行動的だった日々が深く印象に残っている。

リオの貧しい人々のために一生懸命働くルイス・ペレイラさんと食器洗いと一緒にした時、「サンバを楽しんでおられますか」と問いかけたところ「国民の多くが家も職もない状態なのに……もう十年前にやめましたよ」との返事に思わず身の引き締まる思いがした。

今回、コーで色々な方とお会いして多くのことを学んだ。南アフリカの情勢、ラオス難民の人々の様子、アメリカ・インディアンの訴え、第三世界からの出稼ぎ労働者と地元の人々の摩擦解消への努力等々、様々な問題に実に謙虚な態度で取り組んでおられる方々と接して、心が暖まると共に、「MRAは永遠なり」との認識を更に強くした。



## 第三回 コー円卓会議 レポート



第三回コー円卓会議は去る八月二

十二日から二十五日にかけてスイスの  
コーで開催された。四月のアメリカ・  
キャンペーンの成果もあつて、アメ  
リカからの参加者がこれまで以上に  
多く見られた。

### (一)日本問題・アメリカ問 題からヨーロッパ問題へ

一昨年八月の第一回円卓会議は、  
日本の黒字や輸出攻勢に対するジャ  
パン・バッシングで幕を明け、この  
「日本問題」への理解を深めるべく昨  
年五月に日本キャンペーンが行われ  
た。その後の第二回円卓会議（昨年  
八月）では、双子の赤字や競争力の  
低下といった「アメリカ問題」への  
関心が高まり、アメリカの経済人と  
のきめ細かな対話を求めて今年四月

にアメリカ・キャンペーンが三つの  
都市で開催された。

今回の第三回円卓会議では、一九  
九二年のEC統合に関して、日本、  
アメリカ、更にはEC外のヨーロッ  
パ国であるスイスからも保護貿易化  
や、「見えない障壁」を心配する意見  
や率直な質問が浴びせられた。元EC  
の副委員長でギリシャやトルコの  
EC加盟に活躍したりリチャード・バ  
ーク氏（アイルランド）を初めとし  
てヨーロップ側は、この動きは一九  
五十年の鉄と石炭の共有というEC  
の理念誕生以来の自然の流れであり、  
ECはEFTA（ヨーロップ自由貿  
易連合）に対する配慮でも証明され  
ているように自由貿易を標榜してい  
ると強調した。それには民間経済人  
による率先が不可欠とドイツのフイ  
ッシャー氏が他のヨーロップの参加

者に同意を迫るという一筋あつた。  
またある程度強いヨーロップこそ、  
日米に対して健全なパートナーにな  
りうる、という意見も出された。EC  
外に対して「壁」を作らないため  
には事前にEC外と充分協議すること  
と、各国の利害を超えた「超政府  
的」機関による対応が必要である、  
とバーク氏は述べた。そして小グル  
ープでブリュッセルを訪れEC幹部  
と忌憚ない意見交換をはかろう、と  
いう提案も出された。

一方「極めて率直なバッシングが  
出た第一回円卓会議に自分は参加で  
きずに変え残念だった。日本がどこ  
をどう変えるべきか是非論に衣を着  
せぬ建設的な批判を寄せて欲しい」  
と住友電工阪本相談役が呼びかける  
と、「過剰消費、投資不足、不適正価  
格がアメリカの赤字を招いたのであ  
つて、決して日本のせいではない」  
とチェイスマンハッタン銀行、スタ  
ンカード副頭取が謙虚に答えた。一  
方アンプロゼツティ会長は「ヨーロッ  
パは痛みを伴った構造改革が必要である。  
既存の機関は一国中心の動きに陥り、  
保護主義への対応は困難である。こ  
の円卓会議は国際的な解決方法の模  
索に役立つと共に、日本はただ単な  
る経済的挑戦だけではなくヨーロッ

パの変革に必要な文化的な挑戦でも  
あるという問題の深い認識に役立っ  
た」との評価を述べた。三回の円卓  
会議を通して「日本→アメリカ→ヨ  
ーロッパ」という問題点の移行以上  
に、お互いの状況の相互理解、自己  
改革へのイニシアティブといった円  
卓会議の原点に戻った対話が大きく  
前進したことが感じられた。

### (二)円卓会議イン ド キャンペーンの開催

「貿易摩擦はいわば熾況な競争であ  
り、南北問題の解決こそ最も緊急を  
要する」（キャンオン買來社長）、とい  
う認識の下、今回は途上国に対する  
共同行動について多くの時間が費や  
された。  
「適正パートナーの発掘、適正規模  
の事業選択、民間によるジョイント  
・ベンチャーの推進、技術と経営の  
移転の必要性」（ジスカルデスタン  
INSEAD副理事長）という提起  
に対してアメリカ松下電器の井村社  
長は、「部品を購入する外貨に乏しい  
中南米のある国に工場を作った際、  
まず現地に小規模の部品工場を建設  
し、最初の十年間は採算を度外視し  
ても現地の市場を育成するという長  
期計画で進出した。また、タンザニ  
アの工場では部品を無料で提供した

ほか、工作機械の修理工場まで建て、見返りを求めない操業を続けている」という具体的事例を発表した。

一方、インターナショナル・ミューラー社ドエクセン会長の「汚職こそ外貨の最大の無駄遣いであり、先進国側は賄賂の競争を抑制する合意をすべきである」との提起に対してビジネス倫理協会の会長も務めるネビル・クーパー氏(英)は、「単なる精神論だけでは効果はあがらず、むしろ、途上国側で賄賂を受けないと宣言するところが、先進国企業側が安易な行動に走るのを妨げることにつながる」と述べた。フーバー研究所のリカルド・キャンベル教授は、「アメリカ企業は、一定パーセント以上のコミッションは支払わない」という宣言に調印する反汚職法に厳格にしばられている」という実情を紹介し、こうした積極的な情報交換の重要性を協調した。

南アフリカ問題についても率直な意見交換がなされた。アメリカ企業の南アからの撤退に関して、「外国企業が現地にとどまる方が、実態改善に具体的に貢献できるのに、外部からの政治的脅しによって撤退を余儀なくされている」という説明に対してシエラ石油のワグナー前会長は「外国の教育組織などがシエラを名指しで撤退

の圧力をかけているが、現地の黒人や従業員は存続を強く訴えている。現地の社長は白人だが、南ア政府のアルバートヘイト(人種差別)政策を公然と批判してはばからない。我々ができるだけ現地で頑張るつもりだが、やはり一企業としてやれることの限界もある」と実情を訴えて、謙虚に参加者のアドバイスと協力を求めた。

一年の半分近くをアジアで過ごすインターアリアンス銀行フグラータ頭取は、これらを総括して「南北問題やエコロジーの問題に対して今我々が真剣に取り組まなければ、若い世代の産業界全体に対する信頼がまるで見失われてしまうだろう」と警告した。

具体的な結論として、第三世界への足を地につけた取組み方について途上国の経済人の意見を直接聞くために、来春二月末に、コー円卓会議インドキャンペーンを開催することが決まった。

### (三) 円卓会議の新たな展開

第三回目を迎えた円卓会議の今後の位置づけについても鉄道総合技術研究所尾関理事長の司会で活発な議論が展開さ。第三回は正に「ク

ロスロード」であるとSRIインターナショナルのネーター専務理事が述べたように、会議の直前には単なる意見交換と相互理解の形成だけでは、今後継続しても意味がないという疑問を投げかける人もあったが、それに対して「社会の諸問題の根源にあるモラルと倫理の問題と取り組み、自分の社会や国の改革から先ず実行していくという、MRAの原点

に戻るべきである。又、世界にこうした良心的なグループが存在すること自体に意義があり、継続されるべきである」(キャンノン賀来社長)「細かい委員会や事務局を増やして技術的な問題を扱うよりも、モラルを基盤として本音の意見交換ができるという、他の会議とは違ったこの会議の特徴を活かすべきである」(東芝清水副社長)といった日本側の積極的な発言が目立った。

こうして、自分が変わることによって周囲に変革をもたらす「触媒」としての啓蒙活動を一歩進めて、より具体的な「化学反応」を起こしていこうという認識の一致がみられた。他にも日本側から、日本国内で定期的な会合をもって、「日本の諸問題の根源である土地問題」(JR貨物、橋元社長)や他の社会的問題に取り組んでいく意欲が表明される。共に、

「第四回の円卓会議では軍縮や平和の問題も取り上げて欲しい」(住友電工、阪本相談役)との提案もなされた。

一方提唱者の一人フレデリック・フィリップス氏(フィリップス社元会長)から、「八十三歳という高齢でもあり、自らは今後相談役的な立場に退いて後進のリーダーシップと責任による運営を支援していきたい」との感動的なスピーチがあった。今後は日米欧の共同の責任において円卓会議を育てて欲しいとの提案も出たが、ビーター・フグラータ頭取の言「日本はこれまでいつも国際会議にはゲストの立場で参加し、メニユーを選び好みしていればよかったが、これからは参加者として共に責任をとっていかねばならない」というアドバイスを日本側が真剣に受け止める時期が到来した感がある。

これまでの全ての円卓会議を評価して神奈川大学の松岡教授は「今回の円卓会議は危機感を乗り越え最も参加者の気持が一致し、今後の方向づけに対しても確信ある発言が続いて内容的に最も充実した会議になった」と総括した。

# 日米欧財界人 円卓会議に 参加して

東芝副社長  
清水 榮



今回、コーの日米欧財界人円卓会議に初めて参加した。

参加するに当って、私が欧米からのメンバーの見解を聞いてみたいと考えていたのは、つぎの二点であった。まず一つは、一九九二年のEC統合を控えて、ヨーロッパはどのように変ろうとしているのか、強固なヨーロッパ経済ブロックを形成して日本やアメリカなどEC圏外の国々との間の通商に関しては保護主義的な傾向を強めるのだろうかという点である。つぎに、貿易インバランスの是正のために、日本の製造業は輸出を減らし、その代り相手国に工場を建設して現地生産に切替える努力をしているが、そのような直接投資が新たな摩擦を引き起こしはしないかということである。

円卓会議も今年は第三回ということで、参加メンバーはそれぞれ旧知

の方が多く、率直な意見が飛び交い、自由な開かれた雰囲気の中で会議が進められたことは、大変印象的であった。反面、話題が発散しがちで、議論の焦点がなかなか定まらないという感じのするときもないではないが、次回からは会議テーマについての資料の事前配布などにより、この点の改善が図られるということである。

EC統合問題については、元EC委員会副委員長のバーク氏から、現在の進展状況について大筋の説明があった。EC加盟各国の利害関係もあり、一九九二年というターゲットは政治的意味合いが強く、実際にはもっと時間がかかるようである。日米側のメンバーから保護主義への傾斜についての懸念が表明されたが、ヨーロッパ側の発言者はすべて、EC統合は他の国々との間の経済障壁

を高くする意図が進められているのではなく、今後共各経済ブロック間の流通は従来通り行われるという見解であった。

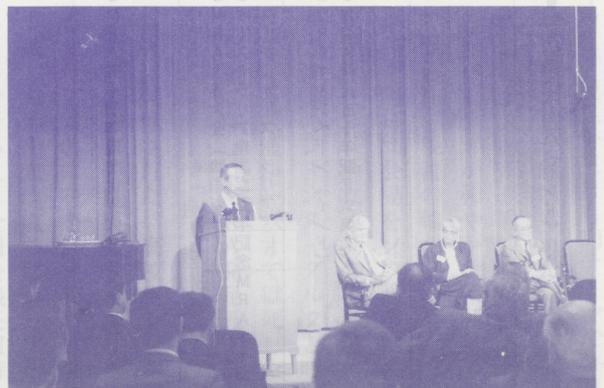
また直接投資の問題については、最近のアメリカにおける日本企業の土地建物の高値買取に対する苦情もあつたが、現地雇用を促進する製造プラントの建設については、摩擦の原因となる心配はまず無からうという意見が大勢を占めた。ただし、投資の規模やスピードについては、受入側の感情を十分配慮し、慎重に決定すべきという意見も出された。

以上いずれもいわば極めて常識的な論議に終わったが、米欧のメンバーと直接話合つたということで、それなりに意味があり、納得できたと思つている。

コーのMRA本部を訪問したのは今度が初めてであるが、数百名が宿泊できる堂々たるマウンテンハウスの維持に携わる有給スタッフは僅か十二人で、料理・クリーニング・庭園管理などほとんどがボランティア活動で支えられている実態を眼のあたりにし、また、多くのMRAメンバーの温かい接待を受け、まことに心洗われる思いで、深い感銘を受けたことであつた。



●常連同士のなごやかな談笑を交わす(左から)インターアリアンス銀行フグラー頭取(スイス)、SRIインターナショナル、ネイター専務理事(アメリカ)、神奈川大学松岡教授。



●パネルディスカッションでスピーチする清水副社長。右にシェル石油ワグナー前会長(オランダ)、フーバー研究所リカドキャンベル教授(アメリカ)、住友電工阪本相談役。

# 第三回コー円卓会議参加者リスト

## ■ヨーロッパ

フレデリック・フィリップス (オランダ)

(フィリップス社元会長)

ハリット・ワグナー

(オランダ)

ハリット・ドクソン

(シェル石油前会長)

(インターナシオ・ミユラー社副会長)

フレデリック・シヨック夫妻

(西ドイツ)

ラインハルド・フィッシャー夫妻

(西ドイツ)

オリビア・ジスカールデスタン

(フランス)

ネビル・クーパー夫妻

(イギリス)

ピーター・フグラール夫妻

(スイス)

リチャード・バーク

(アイルランド)

アルフレド・アンブロゼティ夫妻

(イタリア)

(アンプロゼティ・グループ会長)

リナルド・ブルトーコ

(ドラソ社社長)

ノックス・ジョンストン夫妻

(ロボティック・レジョン・システムズ副社長)

ウイリアム・マグレイン夫妻

(マグレイン・セルフェスティム研究所所長)

ジョン・モアア

(エグゼクティブ・コンベンション・フランス副社長)

ロン・ネーサー

(フランク・ネーサー・アドバタイジング社長)

ロナルド・ネーター夫妻

(SRIインターナシヨナル専務理事)

チャールズ・パリス夫妻

(スペシャル・デイスバッチ社会長)

リタ・リカルドキャンベル

(フォーバー研究所教授)

フランシス・スタンカード

(チエイスマンハットン銀行副頭取)

井村昭彌

(アメリカ松下電器社長、松下電器取締役)

尾関雅則

(鉄道総合技術研究所理事)

賀来龍三郎

(キヤノン社長)

阪本 勇

(住友電気工業相談役)

清水 榮

(東芝副社長)

橋元雅司

(日本貨物鉄道社長)

松岡紀雄

(神奈川大学国際経営研究所教授)

# MRA一九八八年の主な活動

国	内	海	外	
一月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ファイリピンMRAキャンベーンに代表派遣</li> <li>●タイMRAキャンベーンに代表派遣</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●青年育成コース(イギリス)</li> <li>●MRAアジアセンター開設二十周年記念大会(インド)</li> <li>●MRAキャンベーン(フィリピン)</li> <li>●MRAキャンベーン(タイ)</li> </ul>		
二月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第十回理事会</li> <li>●円卓会議アメリカキャンベーン企画会議</li> <li>●(経済同友会専務理事 河合三良氏講演)</li> <li>●第八回通常総会、文化講演会開催</li> <li>●(キヤノン社長 賀来龍三郎氏講演)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第十四回青年育成スタディコース(オーストラリア)</li> <li>●MRA会議(オランダ)</li> </ul>		
三月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●円卓会議アメリカキャンベーン企画会議</li> <li>●(本田技研常任相談役 岡村昇氏講演)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●MRA青年会議(ドイツ)</li> <li>●MRAキャンベーン(モロッコ)</li> </ul>		
四月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●円卓会議アメリカキャンベーンに代表派遣</li> <li>●バザール開催(東京)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●青年育成コース(イギリス)</li> <li>●円卓会議キャンベーン(アメリカ)</li> </ul>		
五月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第十二回MRA日本キャンベーン(小田原・大阪・東京)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●MRA発足五十周年記念会議(フランス)</li> <li>●青年育成コース(インド)</li> </ul>		
六月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第一回円卓会議ミーティング(神奈川大学松岡紀雄教授講演)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●MRA五十周年記念世界大会(スイス)</li> </ul>		
七月・八月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第十一回理事会</li> <li>●MRA発足五十周年記念コー世界大会に代表派遣</li> </ul>			
九月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第三回韓国MRA世界大会に代表派遣</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●MRA世界大会(韓国)</li> <li>●オーストラリア建国二百周年記念MRAキャンベーン(オーストラリア)</li> </ul>		
十月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第二回円卓会議ミーティング(住友電気工業会長 亀井正夫氏講演)</li> <li>●第十一回MRA関西秋季大会開催(神戸)</li> <li>●九州MRA協力会第十八次訪韓</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●MRAキャンベーン(インド)</li> <li>●MRA発足五十周年記念式典(イギリス)</li> </ul>		
十一月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第十二回理事会</li> <li>●第三回円卓会議ミーティング</li> </ul>			
十二月	<ul style="list-style-type: none"> <li>●バザール開催(東京)</li> <li>●第九回通常総会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●青年育成コース(インド)</li> </ul>		

# 第三回韓国MRA世界大会レポート

## テーマ「良心に支配された世界の創造」

……心のオリンピックを日差しして……

去る九月二十二日より二十八日まで、ソウル近郊城南市の韓国精神文化研究院をメイン会場として、韓国MRA本部主催による第三回韓国MRA世界大会が開催された。

MRAが発足して五十年、そして韓国にMRAが紹介されて四十年に当たる記念すべき本年、史上最大百六十カ国が参加して第二十四回オリ



ンピック大会が韓国で盛大に行われる中、「心のオリンピック」を目指して開催されたこの会議には、日本、オーストラリア、イギリス、スイス、フィリピン、アメリカ、カンボジア、マレーシア、中華民国など九カ国より六十二名の海外代表が参加した。

特に日本に対しては、かつて言われた「近くて遠い関係」から、文字通り「近くて近い関係」に向けて変化の兆しに見える日韓関係を、この会議を通して尚一層良好なものにしたと、幅広い層からの積極的な参加が求められ、この要請に応え野田卯一氏（自由民主党顧問、元建設大臣）を初め、相馬雪香氏（難民を助ける会）会長、日韓女性親善協会会長）当協会会長の住友義輝氏など、二十六名が参加した。

地元韓国からは、金永植文教部長官、金在淳国会議長、金相俊ソウル市教育委員会教育監、元興均世宗大学総長を初め、政界、産業界、教育界など幅広い分野から延べ千人以上

の参加があった。また今回天安市の湖西大学英文科の学生を中心とするMRAシングアウト・グループのメンバー約四十名が全日程泊まりがけで奉仕したが、そのはつらつとした活躍ぶりは、高校生シングアウト・コリアの若さ溢れる歌や踊りと共にフレッシュな印象を参加者に与えた。韓国で盛んな宗教の一つである圓仏教の尼僧四名が食事関係の責任者として参加者の世話をしていた姿も、MRAらしい光景であった。

メイン会場の韓国精神文化研究院は、ソウルより車で一時間弱の城南市にあり、政府の学術研究施設として、同時通訳設備を備えた国際会議場を初め、大小討議会、宿泊施設等が、周囲を小高い山に囲まれた静かな環境に恵まれた広大な敷地内に配置されていた。

### 盛り沢山な プログラム

二十二日夜には空港からバスで会場に到着したばかりの外国からの参加者を、民族衣装のチマ・チヨゴリに身を包んだ女子大生達が出迎え、早速開会式（テーマ「モラル・ルネッサンス」）が、車光善氏（韓国青年団体協議会事務局長）の司会で行

われ、翌二十三日も同テーマで終日熱心な討議が続けられた。尚、同日夜には金文教部長官主催によるガーデンパーティが和やかな雰囲気の中で催され、親善の輪が広がった。

二十四日は会場をソウル市内の柳寛順（三・一独立運動の指導者の一人で韓国のジャンヌ・ダルクと呼ばれている。僅か一六才で獄死した）記念館に移し、MRA発足五十周年記念式（テーマ「良心を求めて」）が盛大に開催された。高校生シングアウト・コリアの見事な歌と踊りも披露され、式典に花を添えた。式典終了後、海外代表は直ちにコリアナ・ホテルで行われた金国会議長招待午餐会に臨んだ。

韓国の祝日「秋夕（チュソク）」にあたる二十五日はオリンピック・メインスタジアムにて陸上競技を観戦した後、南北非武装地帯最前線の一つ、「愛妓峰（エギボン）」を国防大臣の特別許可を得て視察した。韓国人々が先祖の墓にお参りし、豊稷を天に感謝するこの日、穏やかに流れる漢江の向こう岸には全く人の気配がなく、静寂感が辺りを支配していた。双眼鏡のレンズを通して「北越歓迎」と書かれた立て看板が見えなければ、民族分断の厳しい現実を一瞬忘れてしまうほどの山水画を思わ

せる美しい風景であった。

その後会議は、「家庭の調和」、「憎しみの壁を越えて」、「和解」、「良心に支配された世界の創造」、そして最終日の「コミットメント・確信」の各テーマに沿って続けられ、最終日まで熱のこもった意見発表が行われた。会議の合間にも、食事やお茶の時間を利用して参加者同士の交流が活発に行われ、当初感じられたやや固い雰囲気も徐々に消え、次第に一家族としての融和と自由で暖かな雰囲気が出された。発言も心の深い部分からのものが増え、盛り上がりを見せた。特に日本人に対する憎しみをいかにして克服したかという発言も度々韓国側からなされたが、その発言を真摯に受け止め、過去の過ちを謙虚に謝罪する日本人参加者の態度は感銘を与えた。

最終日前夜には、延世大学経済学部の前で、延世大学で司会した「文化の夕べ」が行われ、「アリラン」や「武田節」など各国自慢の民謡や踊りが披露された。また国立博物館見学やソウル国立芸術学校学生による民族舞踊の鑑賞などを通し、五千年の歴史を誇る韓国文化の一端に触れる機会を得るとともに、日本が如何に韓国から大きな影響を受けてきたかという認識を深めることができた。

## 憎しみの壁を越えて

第三回とは言え実に二十数年振りに開催する世界大会であり、韓国の始どの人にとつて未知の体験であったにも拘らず、無事に終了したことは約二年前から準備に携わってきた世界大会準備委員会を初めとする人々の努力の賜である。疲れた素振りも見せず、常に私達外国人を気遣う韓国の人々の献身的な態度に感激した参加者も多かった。この会議を通して培われた友情と信頼を、旅の思い出としてアルバムにしまい込むのではなく、将来に向けてより確かなものにしていきたい。

人と国との友好もまず一人一人の人間同士の交流から始まる。お互いを一人の人間として理解し尊重する心なくして真の意味での交流はあり得ない。「過去を忘れることはできないが、許すことはできる」。昨年訪れた中国に引き続き韓国でもこの言葉を聞いた。日本がかつてこの国で行った行為は日本人がどのように理由をつけようとも正当化されるものではないことを改めて知った。戦後四十年過ぎた今日でも、言葉が奪われ、名前を奪われ、宗教を強制された記

憶は鮮明である。何事につけ過去のことを持ち出し、必要以上にこだわるのは確かに両国の将来にとって好ましいことではないが、現代の日本人の余りにも歴史に無頓着過ぎる言動が韓国人を苛立たせ、警戒心を抱かせる原因の一つであることは明白である。このような心の傷は経済的な力だけでは癒せない。反省する心と許す心がお互いにあるこそ初めて心も通いあう。

ある韓国の老教育家は数年前日本の若者から「日本の過去の行いをどう思うか」と問われ、「憎しみでは何とも解決されません。これからは皆さんのような若い世代が協力しあつて

二度とあのようなことの起こらないように新しい平和な関係を作つて下さい」と答えましたと淡淡と語っていたが、年代的に最も被害を蒙つたはずのその人の、このように澄み切つた心境に至るまでの心の葛藤を思うとき、本当に申し訳なかつたところから感じ、私達が力を合わせてその期待に応えなければならぬという決意を新たにしたい。

日韓の間には難しい問題が数多くあるのは事実だし、その解決は容易なことではないからこそ、私達の良心に基づいた行動が今強く求められているのではないだろうか。

国際MRA日本協会 寒河江亮

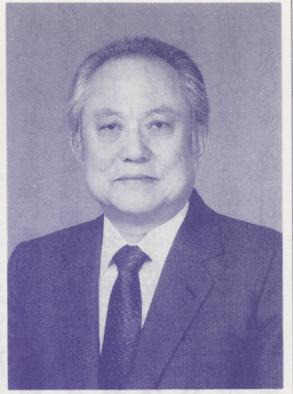
**MRA**  
ワールドマガジン  
**FOR A CHANGE**  
フォー・ア・チェンジ

**中 付 受 読 講 期 定**

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌（英文年間11回発行）定期講読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、ご希望の定期講読料（3ヵ月分＝¥1,000 1年分＝¥4,000 ※共に郵送料込み）を郵便振替（口座番号：東京8-38289）、又は現金書留にて下記の住所にお送り下さい。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4  
社団法人 国際MRA日本協会  
「フォー・ア・チェンジ」係

スペシャルクリスマスオファー！  
来年一月末までお申し込みの場合、年間講読料¥4,000が半額の¥2,000になります。（但し最初の一年のみ）お申し込みはお早めに！



## 「MRA世界大会参加者

歓迎の挨拶」 (抜粋)

国会議長 金 在淳

●日時 一九八八年九月二十四日  
●場所 コリアナホテル

私はまず、「絶対正直、絶対無私、絶対純潔、絶対愛」の四大標準による人間性の回復を目指しあらゆる力を傾注しているMRA世界大会がこのソウルで開催されること自体が「見えざる手」によって導かれたのではないかと思うのです。皆様方をわが国に遣わされて、クリスチャンである私に良心と道徳の意味を再び考へさせて下さる神様の大きな愛が感じられるのです。

この地球では文明が発達し、便利になればなるほど人間はますます利己的になり、物質万能主義に偏る傾向が見受けられ、良心と道徳は衰退しているのが事実です。又、日々の変化が激しい最近の世の中では道徳

という言葉が何か骨董品でもあるかのような気持ちを持つ人が多いことも事実です。しかし、MRAの方々のように今日の人間性と道徳性喪失の時代的現象を正確に認識して、良心と道徳の回復を通し人類の歴史を変えるという使命感を持つ方々がいる限り、私達は決して挫折、落胆する必要はないでしょう。

その昔、東洋の聖人の一人である孔子も「道徳の内容は仁、即ち人間の善意は慈悲心または愛と信頼である」と指摘しています。世界の指導者達はその仁を実践し道義政治を行なうことがかつてないほど切実に求められていると思うのです。

皆様もよくご承知の通りこのソウルではイデオロギー、宗教、人種、文化の壁を越えて世界各国より史上最大の一六十カ国の選手達がオリンピックに参加して熱心に競技を始めています。東西人類の大和合の祝典が平和な雰囲気の中で進行しています。皆様か明日、非武装地帯最前線の一つである「愛岐峰」に行かれるとお分りになると思いますが、我が民族と唯一の兄弟姉妹である北韓だけが人類和合の大祭典に参加せず、却って敵対感を一層強めているのです。実に残念で心の痛むことです。だからこそ私達の胸に民族和解の悲願

願が突き上がるのです。MRA運動の目標の通り、我々が人間の心の故郷である良心に従って人間性を回復し憎悪の壁を越えて新しい人間、新しい家庭、新しい社会、新しい世界を創造していくとすれば、我ら六千万韓国人に苦痛と悲しみを与えているこの分断の壁も打ち破ることができると敢えて期待するのです。

いくら素晴らしい理想でも行動が伴わなければ空虚な「広野の声」となるでしょう。MRA精神がこの世の中で具体化され、良い結果をもたらすためには皆様のような積極的に行動する人々が必要だと思います。人類の歴史を振り返ってみれば常に志のある少数の人々の強力なリーダーシップがその時々の人類の直面した問題を解決してきた事実を思い知らされます。即ち皆様こそそういった少数の人々だと私は思うのです。

皆様か使命感をもってこの暗やみに光を一つ一つ照らす時、社会がそして世界が明るくなっていくのだと思います。暗く波高い海に行く人類の光になるべくオーストラリア、イギリス、スイス、アメリカ、中華民国、カンボジア、フィリピンそして日本からここに韓国に集った皆様方の真摯なる姿に接し、明るい明日への確信を得ることが出来ました。



●湖西大学シングアウトの学生達と交歓する台湾から参加した若い女性。



●朱永夏世宗大学理事長(左から二番目)主催晩餐会で握手する(左から)野田卯一氏、一人おいて金宇鐘牧師、ダニエル・リュウ中華文化大学教授(台湾)。

# 生まれて初めての 海外旅行

= 韓国で過した七日間 =

大木一郎

生まれて初めての海外旅行への期待に胸を躍らせながら海の上をひとつ飛び、陸地が見え始めた時は「あっ、もう韓国の上空を飛んでいるのか」と、自分の年も忘れて子供のように小さな窓にしがみついて下を覗いていました。成田から一時間四十分程でソウル金浦空港に着きますが、沖繩より近いのに驚きました。初めて見たソウルの街はオリンピックに沸きかえっていました。「何と素晴らしい、そして力強い活気に満ちた国だろう」と、私は何か日本には無くなってしまうものを韓国で見つけたような気がしてなりませんでした。私達を迎えて下さった韓国MRAの皆様の暖かで誠実な対応に頭の下がる思いでした。対日感情は必ずし

も良くないと聞いていましたので、どうなるものかと思っていたのですが、本当に安心できました。会場となった韓国精神文化研究院はとても良い環境の所にあつて快適な七日間を過ごさせて頂きましたし、会議以外の見学もとても印象に残りました。国立中央博物館に行きましたが、そこは元の朝鮮総督府の建物だったというところで、横暴な日本軍閥が力づくで朝鮮半島を支配したその名残を見ているようで後味の悪いものでした。また、韓国のジャンヌ・ダルクと言われている柳寛順の名前をとった記念館では、色々と聞くに耐えないお話を聞き「ああ申し訳なかった。許して頂きたい」と、思わず口から出てしまいました。このような悲惨な思い出が残っているにも拘らず、韓国MRAの皆様に手厚くそして心のこもったおもてなしをして頂き、ただただ感激致しました。

もう一つ強く印象に残ったのが、愛妓峰（エギボン）の南北軍事境界線の見学でした。同一民族が軍事的に対立しなければならぬとは、それが運命とは言え本当に不幸なことです。韓国軍の若い兵隊さんに祖国の防衛ご苦労様と握手をして激励してきましたが、この兵隊さん達の中にも、身内や親戚の方々が北朝鮮に

居られる人もいるでしょうにと、言葉には言い表せないほどの胸の痛みを感じました。この厳しい現実をこの目で見る事ができた私ですが、実はこの大会に参加するにつきましては、出発直前に仕事の関係で「参加を取り消せないか」と頼まれました。でもこの機会を逃したらきっと後悔するだろうと思ひ、よし場合によっては自分の今の職を投げ捨ててもよいと一大決心をしての参加でしたが、本当に参加して良かったと思っています。色々な意味で幅広い勉強ができたこと、少しずつですが韓国という国が分かってきたこと、そして多くの友人ができたことなど何ものにも代え難い心の財産となりました。中でも年齢的にも話が合い特に親しくなった李起勝さんには、私が閉会式でスピーチをさせて頂きました時に通訳を買って出たり、お互いの身の上話などをしたりして親交を深めることができました。

## 日本人の親友を 探してほしい

その李さんの小学校の恩師は私と同じ静岡出身の方だそうで、特別可愛がられ、夏休みを恩師の実家の浜松で過ごしたりしたそうです。又、

旧日本軍に志願し、千葉県の高射砲学校で教育を受けたということです。その当時の親友が藤枝の出身で、「昭和十九年に部隊配属で別れて以来、音信不通で生死も分からないが、できればその親友を探してほしい」と李さんから依頼されました。私は大変お世話になったお礼に何とか役に立ちたいと思ひ、「分かりました。必ず探して見せましょう」と約束はしたのですが、実の所は全く自信がありませんでした。帰国してからうまく探すことができるだろうかと心配でたまりませんでした。でもどんな事をして探し出さなければと思



●李起勝さん(右)と懇談する筆者(左)。

い色々と考えた揚げ句、その方が旧制島田商業を卒業されたと李さんが話していたことを思い出し、学校に連絡しましたら住所が分かりました。

すぐに電話番号も調べ、李さんの探しておられたその親友の方と直接お話しができました。その方は増井さんという方で私からの突然の電話に「とても信じられない。本当ですか？」と何度も同じ言葉を繰り返して喜んでくれましたが、私にとってもこの上ない喜びでした。早速李さんにおの方の住所をお教えることができました。

韓国はまだまだ私にとって未知の国ですが、これから歴史や韓国語の勉強もし、もう一度行きたいと思っています。これからは近くて遠い国でなく、近くてすぐに行ける国となるように望みますし、隣の国同士共に手を取り合って世界の平和のために尽くすよう努力すべきだと思います。私は日本と韓国のために何かお役に立つ事があるならば、どんな小さな事でも行動に移していくつもりです。

### 港トラック運送(株)取締役

## 「遠い国」を訪ねて 考えたこと

林 一夫



古代より様々な文化や芸術が隣の朝鮮半島から日本に伝えられてきたのに、やけに遠い国のような気がするのには何故なのだろうか。

小学生の頃、転校先で初めて「朝鮮人」と呼ばれる男の子に出会った。学力も普通だし、何よりもこの日本で生まれ日本で育った彼をどうして学友達が差別するのか不思議で仕方がなかった。

彼の家に遊びに行ったことがある。町外れに、粗末な家屋がまるで肩寄せ合うかのように密集して建っていた。そこから来たお婆さんが僕の家を勝手口で、古新聞やボロ布、空き瓶を集めていたのを思い出す。「ビール瓶」と言えずに「ビール瓶」と言うのを聞いて、冷やかしたりしたこともあった。

実際、僕の韓国朝鮮人に對する知識はこの程度のもので、それ以上の情報は入って来なかったし自ら求めることもなかった。

今回韓国を訪ねる前に、一応日本との関係について知っておこうと、近代史をひもといてみた。ところが、資料を読み進むにつれてだんだん憂鬱になってきた。朝鮮半島を植民地支配し、傍若無人に振る舞う日本のやり方に次第に嫌悪感を覚え始めた。朝鮮民族の尊厳、文化を否定する日本の行動はエスカレートしていき、三・一独立運動の頃に最高潮に達した。

そしてこの時期は反日独立運動に對する日本の弾圧により、朝鮮半島に最も多くの犠牲者が出た時期でもある。

こういう過去の経緯があるのでは、日本人はとても歓迎どころではないだろうと思いつつも、参加を決心した。

会場へ向かうバスの中からソウル市内を見たが、予想を上回る高層ビルの多さに、最近の韓国の実力を改めて見せつけられた気がした。飛行機から眺めた風景もなかなか立派だったが、近くで見るとさすがに迫力がある。全人口の四分の一が、首都ソウルに集中していると言われている。

る割には、それほどの混雑は見受けられない。街にも清潔な雰囲気がある。

今回の韓国滞在中、我々は殆ど国賓並みの扱いを受けた。しかし、親しくなった韓国の方々から過去の話を聞かせてもらった時には、日本人としての自分自身に原罪が科せられているような気がしてたまらなくなつた。

或る方に、「日本語がとてもお上手ですが、やはり強制的に習わされたものなのでしょう」と尋ねると「日本語はとても難しくて無理にでも教え込まなければ覚えられないものではないですよ。ところで千葉の稲毛は今どうなっていますか？ さぞ変わったことでしょうね。是非もう一度行ってみたいです」とこんな調子でアッサリとかわされてしまった。僕に負担を感じさせまいと考えてのことだろう。

今後この国のために自分に何ができるのかと考えた。まず歴史を学び、ハングルを習い始めた。今回、全く理解できないハングル文字の洪水に少々頭痛さえたのだが、現在は愛着を覚えるまでになった。これから長い付き合いになりそうなこの国の人達に幸あらんことを。

(財)電気通信共済会



## 道徳の国、韓国

多羅みちえ

オリンピック開催中の韓国で行われたMRA世界大会に参加致しました。初めての韓国訪問でしたが、ソウルの町並みはとても立派で美しく、経済的発展と共に韓国の方々の大変な努力をも感じさせられました。会議で様々な方々のスピーチをお聞きして、韓国という国の政治・経済・教育・文化の根底には道徳心が流れていることを感じました。

南北軍事境界線視察では、漢江を狭んで韓国と対峙する朝鮮民主主義人民共和国の一部を見ました。冷たく張り詰めた空気の中で、同一民族でありながら国土が分断され自由に行き来できないのだと思うと、とても悲しい気持ちになりました。

MRA発足五十周年記念式が行わ

れた柳寛順記念館の建物は、日本軍に捕らえられ惨殺された独立運動のリーダーだった柳寛順という十六才の少女を記念して建てられたものでした。私にその話をして下さった韓国の女性は、これは過去のことであっていつまでも過去にこだわってはいけなと言われました。私はその言葉に感謝しつつ、韓国の方々はたとえ許して下さいても、決して過去の事実を忘れることはないだろうと思いました。私達日本人一人一人が、過去に韓国やアジアで起きた事に対して謝罪しなければならぬ憎しみや苦しみから自由になって頂きたいと思えます。そして過去の事だけではなく、現在観光や仕事でアジアを訪れている日本人は迷惑を掛けてはいないだろうかというのを改めて考える必要があると思えます。

日本の技術・経済力、心、精神がアジアに、そして世界に必要とされ、アジアの国々と共に世界のために何かできる日が来るように私も自分の役割を見つけて努力したいと思えます。

韓国から帰って以来、韓国のことを聞くと何か身内のことを言われているような気がしています。

ネッスル(株) 釜山支社(二人目)



●高校生シングアウト・コリアの公演(柳寛順記念館)。



●午餐会で挨拶する金玉珍オリンピック組織委員会事務総長(左)。右は韓国MRA本部理事長チョン・ジュン氏。

### 入会の御案内

社団法人国際MRA日本協会は、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する具体的な活動を行なっています。その事業の充実、発展を図るために左記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼びかけています。

(1) 正会員 個人 年額 3,000円

法人 年額 50,000円

(2) 賛助会員 個人 年額 1,000円以上

法人 年額 50,000円以上

郵便振替口座

東京八三二八二八九

口座名 社団法人

国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供 ②機関紙「MAJニュース」等の送付 ③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出会い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣

# 第十一回MRA関西秋季大会レポート

●日時 一九八八年十月二十九日～三十日

●場所 神戸住吉研修所

奇しくもロンドンのMRA発足五

十周年記念大会と同じ日の開催となつた第十一回関西秋季大会は、初めて百人をこえる参加者を得て、去る十月二十九日から三十日まで神戸の住吉研修所で開催されました。

まず八月のMRAスイス世界大会、九月のMRA韓国大会に参加された方々から、次々と溢れ出るような体験を聞かせて頂き、世界の激しい動きの中で、これからの日本の在り



方をしっかりと学ぶことができた。

四年前から始められたスイスとの中学生交流プログラムに参加し、この世界大会にも参加した学生達も今回十七人が参加しました。第一日の夜中十二時すぎに会場に駆けつけた高校生もいてその熱意には驚かされました。

天皇陛下と同年齢ながら、毎年ソ連を始め世界中の国々を訪問されている野田卯一先生からは、「最近の中国、ソ連の動きに基本的外交方針の転換が読み取れるが、それはこれまで五十年間に亘って世界の再造を目指してきたMRA運動が着実に浸透した証左であると見ている。MRAの健在は世界人類にとつての幸せであるということをしつかりと心して頂きたい」という幅広い体験に基づいた励ましがありました。

「様々な物事が日々激動する今日、物事や人の或る一点の在り方を固定観念化しそれにしがみついていたのでは正しい姿を見ることはできず、世界や時代にもとり残されてしま

う」と相馬雪香さんが述べた。

また御主人の相馬恵胤さんが「三年前に大病を患い死を覚悟したが、家内にウソをついたまま死んでいくのは感心したことではないと考え、それまで話さなかったことを全て正直に打ち明けたことを驚かせた。するとそれを契機に病状も快方に向かい、今夏には夫婦揃ってコーに行けるまでに回復した。コーでこの話をしたら意外なほど沢山の拍手があつたのでどうしてかと考えたが、偉そうな顔をしていてもみんな自分と同じようなことをやっているのだという安心感を与えたことが受けた理由だつたらしい」と語ると、いささか緊張気味の会場にはっとした空気が流れました。「姑と四十八年間暮らしてきた自分は嫁・姑関係のベテランだと自惚れていたが、いざ嫁と暮らし始めると、年をとっているだけにプライドが邪魔をすることも多かった。若い人はこうすべきなどと勝手に思っていることが度々あつてその度ごとに変わらなければならぬ。プライドが傷つくならばそんなプライドは傷ついて無くなった方がよい」という相馬夫人の言葉は、若い人達に自分の考えを押し付けて、その傲慢さに気が付かない私達にも思い当るところが少なくありません。

車椅子で参加した小東一枝さんの「コーの大会に参加するまでは自分の悩みしか頭の中になつたが、コーに世界中から集つた人達が、祖国のため、世界のために命を賭している姿に比べ、自分の悩みがいかにつまらないものであるかを知つた」という分科会での発言は、他の参加者に大きな勇気を与えてくれました。

「これまで田舎に法事で行く際、家内から必要経費として渡されたお金がある」と、黙って飲み代に充てていたが、この秋季大会に来るようになってから、それが気になり始めた。前回の法要の際から余つたお金は正直に申告して返すようにした。正直、純潔、無私、愛という四つの絶対道義標準に一ミリでも近づくと努力したい」という或る会社員の発言は、誰でも悪いことをやっている、みんな渡れば恐くないという風潮に対する大きな挑戦です。

夜は、スエーデンの絵本「エンジンピール」から作ったビデオを見たり、その後のフォークソングコンサートではMRAソングの「新しい世界」をみんなで心ゆくまで歌いました。

「新しい世界、決意をすれば今宵始まる。一人一人の心の中の、固い決意に世界は変わる・・・」。



十月初めに「軍港都市」ウラジオストックで開催されたソ連科学アカデミー世界経済国際関係研究所プリマコフ所長主催の「アジア・太平洋地域の平和と協力への対話」に参加のため、初めてシベリアを訪れる機会を得た。

この会議には、アジア・太平洋諸国を中心に東欧諸国なども含めた三十五カ国から参加。アメリカのホルブルック元国務次官補、タイのコーマン元副首相、フィリピンのシャハニ上院外交委員長、日本の佐伯喜一野村総研相談役などの顔が見られた。ソ連からはロガチエフ外務次官を含む約二百名がチャーター便なども使って参加した。

## 東ロイカ 極ペレスト事

—ウラジオストックを訪ねて—

藤田幸久

### 一、ベールを脱いだ要塞 都市—北欧の長崎

ソ連軍太平洋艦隊司令部があり、つい九月三十日まではソ連市民も立ち入れなかったウラジオストック。鉄とコンクリートに固められた暗く冷たい都市というイメージとは正反対の美しい町並みが、抜けるような秋晴れの空の下に横たわっていた。入り組んだ湾と緑は長崎、岡をはさんで点在する町並みはサンフランシスコ、そして荘重な建物の間を市電が走る落ち着いた閑静な雰囲気はストックホルムへのようである。

並木道や花壇、公園の芝生もきれいに整っている上に、広告やネオンサイン、そしてゴミもまばらで、とても清楚な趣をかもしている。行き交う人々も船員風のキラキラした感じよりも、透き通るように白い長身の人々が多い。交差点の地下の壁に据えつけてある公衆電話が壊さずにあたり、真夜中でも若い女性が道を歩ける治安の良さなど、スカンジナビアの都市がシベリアに「飛び地」して来ているかとの錯覚にすら陥るようであった。

スーパー、デパート、書店などをのぞいてみたがスペースがゆったりしていることと、水産物に新鮮な野菜、果物など意外と物が豊富にあるのに驚いた。気候に合った靴、手袋、コートなどの売り場が大きく、装飾品、嗜好品、娯楽製品のコーナーが狭いことが、却って健全な消費生活を営んでいるという印象を与えた。実際この平均所得は、外国航路の船員なども多いためソ連の中でも相当高い部類とか。コンサートに招かれた海員クラブ、踊りと歌のついた海産レストラン、そして会議が開かれた「ハウス・オブ・ノレッジ（知識の家）」といった施設もなかなかのもので、「鎖国」中も独自の文化と社会活動を営んでいたことがわかる。

外国人参加者はどこでも自由にカメラの撮影が許された。TBSのビデオ撮影も可。グラスノスチ（公開）を印象づけたようである。それでも人にカメラを向けると、ぎこちなくなったり、恥ずかしそうな表情をしたりして外国人に慣れない初々しさがあった。干してある洗濯物が皆古ぼけていたり、ホテルのエレベーターや洗面所が時々故障したりといった不便な社会生活の側面も見られた。シベリア鉄道の起点でもあるウラジオストック駅のプラットフォームで顔にペンキを塗ったヒッピー風の女性がカメラに手を振ってきた時には、開放されたウラジオストックが西欧物質文明に汚染されぬ方がまだましだ、という自分勝手な気持ちさえ湧いてきた。

### 二、外圧期待のペレスト トロイカ(改革)

三十五カ国約百十名の外国人参加者は三つの分科会に分かれて合計三回のフリー・ディスカッションを行ったが、一方的な政治宣伝の応酬がみられた政治的分科会に比べて、私が参加させてもらった「経済開発と地域協力」の分科会では率直でかみ合った対話が展開された。或る意味

では今回の会議での主催者側の狙いがこのグループで展開されたと言えよう。

それは、外国特にアジア・太平洋諸国との経済交流を通して、具体的な成果のまだ出ていないペレストロイカのバネにしたいという意図である。

ハバロフスクの経済研究所の副所長は、極東におけるペレストロイカの意味は「これまでの経済砂漠を中央支配から脱却させることであり、中央による植民地的開発から独自の経済開発へと転換することである。

一九七〇年代に政府の投資が増えたが、生産も効率も上がらなかった。

民間事業の促進も含めたこの地域の新しい役割分担のコンセプトを確立すべきだ」と基調スピーチでぶち上げた。いわば自治権を拡大し対外経済交流を図ろうという訳で、主要目標である日本などと、水産業、林業、観光開発などの分野でのジョイント

・ベンチャーなどを望んでいる。しかも、中国や北朝鮮の代表の目の前で、「モデルとしては台湾や韓国の方が価値がある」とか「諸規制の緩和のプロセスや経済特区の設置などは、中国の例から学ぶのが最も良い」といった思いきった意見が科学アカデミー側から積極的に出された。「日ソ

関係が芳く、展しなかったのは、日本側だけでなくソ連側の問題がある。各省庁間の対応ができない仕組みになっている」と科学アカデミー側が

述べる。モスクワから来た対外経済関係省の高官が「俺達の責任ではない」とやじる場面もみられた。インツォリスト（国営旅行社）の代表

が観光開発の手前味噌のような話をすると、「観光産業を一社が独占するよりも小さな代理店を多く作って対応したほうがよい。ホテルで食事の時にバンドの音がうるさ過ぎて話もできないし、サービスが遅すぎる、

といったソフト面での改善がなされなければ、いくら施設を作っても日本の観光客は寄りつかない」と、科学アカデミー側から皮肉られるというシーンもあった。

ジョイント・ベンチャーや企業進出の条件についてカナダ・ニュージラント・オーストラリア、日本などのビジネスマンが具体的な質問をしたことも、外国側の問題意識を知らせて、地に足のついた対話を展開する意味で有意義だった。外国側は受け皿の中身や、インセンティブについて問いただしたのに対しソ連側は、進出企業の最高課税、エクイティの比率、外国人マネージャーの採用可否、資金条件などについて説明

した。必ずしも内容的に満ち足りるものではなかったが、ここまできたら（ペレストロイカで）前進するしかないという意欲は感じられた。一方、

日本のある参加者は、「今迄日本側の態度は、インフラが無いから投資をしない、というものだったが、これからはむしろ、インフラを整備するために投資をする、といった大胆な

政策転換が必要である」と提案した。また、極東開発の方法論についての対話の際に、数名の人が、エコロジーの側面への配慮を訴えた。これはエコロジーの問題が今や東と西、

そして南と北の国々を全て巻き込む共通の問題に発展していることを裏づけると共に、ソ連知識人の問題意識のレベルの高さも物語っていた。

こうした一連の対話は、（この全てが周知な時間稼ぎや「やらせ」でない限り）ペレストロイカの直面している課題を直接垣間見たようで極めて新鮮なものであった。明らかに目標（敵）はモスクワの官僚体制、或いは既得権であり、インテリ層と地元の実務家が我々外国人を立会人（ウイットネス）、或いは緩衝地帯（バッファー）において挑戦している姿であった。実際ウラジオストックの開放には軍関係者の他にウラジオストック・マフィアと呼ばれる既得権の

所有者も反対したとのことである。それでも、こうした意見対立があったことを、海軍の幹部が外国人記者との記者会見で明らかにしたのは隔世の感があった。ソ連極東のアジア

・太平洋へのデビューはペレストロイカへの外圧利用と表裏一体でもある。

## 三、外国人初の

### 家庭訪問

会議後私の方々の希望が叶って、他の日本人二名と共にソ連人の家庭に昼食に招かれた。奥さんは日本の歴史を勉強している学者で日本語堪能。御主人は港湾関係のエンジニア。二人の息子を含めて一家で大歓迎してくれた。古いアパートの六階は床や壁などが大分痛んでおり、自分で補修に手をかけている最中とのこと。日本の広い3LDKという広さだが、リビングルームにダイニングテーブルを広げてもなしてくれた。狭いところをこうした部屋の多目的利用で賄っているところは日本的である。整理整頓の良さ、部屋を一つ一つ案内したり、客の一人一人に食事やサービングしたりする姿は西ヨーロッパの人々と全く同じ。刺身に中国製の醤油まで準備した歓待振り

に、こちらは圧倒されたが、向こうにしてみるとウラジオストックが開放されたおかげで迎えられる初めての外人客であった。行き帰りにアパートの人々が奇異そうに我々を眺めたのも納得がいった。

## 四、北朝鮮一行との 交わり

会議の合間に様々な国々の人々と話をする機会を得たが、北朝鮮の一行とは全く話す機会が無かった。最近には孤立気味で、ソ連ともギクシャクしている面もあってほとんど外国人とは混じらず、グループ六名でいつも行動を共にしていた。時々私の方から挨拶を試みたが反応が無かった。

最終日にたまたま同じエレベーターに乗った際、唯一英語が上手な団長格の移動大使に、「朝鮮半島が分断され、戦前戦後を通して不幸をたどったことは我々日本の責任が大きいの、日本のコリアに対する迷惑は何世紀にも亘るもので申し訳ない」と私が切り出すと、先方もビックリしたような顔で耳を傾けてくれた。丁度ウラジオストック空港で時間待ちの際、その人の隣にすわって私から話しかけると、「実は自分は東京外

語大の出身です」と突然、日本語にスイッチしてきた。すると他の北朝鮮の人々も二人ぐらいよってきて日本語での会話に加わった。公式の場では使っていけない言葉だが、ここでは打ちとけた会話になった。中国・ソ連に次いでペレストロイカの嵐が北朝鮮にも吹いて欲しいという感慨が咄嗟にわいてきた。

船上パーティーでタイ、マレーシア、フィリピンや私（日本）という自由圏と一緒にカンボジア（プノンペン政府）やラオスの共産主義政権の代表が混じり、ウォッカと一緒に氣勢をあげたが、彼等がこの共産大国ソ連で起こりつつある新しい流れを、切実な表情で注視していた姿が印象的であった。ハバロフスクの市場で黙々とキムチを売っている朝鮮人婦人の姿を見るにつけても、ソ連での新しい動きが後戻りをしないように見守っていきたい。

最後に今回こうした貴重な機会を作って頂いた安全保障問題研究会の末次一郎先生に心から感謝したい。

(社)国際MRA日本協会 専務理事



●ウラジオストックの金角湾。空母等大型船の姿はなかった。



●家庭訪問先で。左上が筆者。

## 事務局近況

●本年度最後のIMAJニュースをお届けします。本年も国内外で様々な行事が催され、事務局員もアジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、ソ連と世界中を忙しく飛び回りました。そのレポートを是非お読み下さい。

●次号のIMAJニュースは、二月下旬の発行予定です。住友電工会長亀井正夫氏（関西国際空港(株)会長、元国鉄再建委員会委員長）の講演「政治臨調」や、ベトナム、カンボジア、オーストラリア、韓国、台湾の若者達が日本に直言するMRAミニシンポジウム「若い日外国人から見たニッポン」の様子などをお伝えする予定です。ご期待下さい。

●去る九月より来年の二月まで、オーストラリア建国二百年記念MRAキャンペーン「オジー・アクション」が豪州各地を巡回しています。日本からは高橋千恵さんが参加して活躍しています。

●十月二十九日に、千五百人の人々がロンドンのピクトリアパレス・シアターに集い、MRA発足五十周年を盛大に祝いました。千葉一夫駐英大使が日本からの祝辞を代読されました。

●よいお年をお迎え下さい！